

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』に登場する光り輝くススキと絵画的風景(前編)

石井竹夫

帝京平成大学薬学部
e-mail : tishii@thu.ac.jp

Shining Silver Grass and the Pictorial Landscape Appeared in “Night on the Milky Way Train” Written by Kenji Miyazawa (The First Part)

Takeo ISHII

Faculty of Pharmaceutical Sciences, Teikyo Heisei University

Keywords : 文学と植物のかかわり, J.A.M. ホイッスラー, J.M.W. ターナー

『銀河鉄道の夜』では、夢の中でジョバンニがカムパネルラと一緒に銀河鉄道の列車に乗り込んで黒い丘から天上に旅立つ。最初に到着する天の野原には、紫色の細かな波をたてたり虹のようにきらっと光ったりする青白く光る銀河が流れ、月長石でも刻まれたような紫の「リンドウ」と緑の「芝草」が銀河に沿って走る鉄道沿線に生え、そして「ススキ原」の中にはたくさんの青や橙色の光輝く「三角標」が三角や四角などの星座の形になって立っている(第六章「銀河ステーション」)。天の野原にはススキが光り輝くとは記載されていないが、「銀河だから光るんだ」というように、銀河の青白い光を浴びて「ススキ」が銀色に光輝く様子が間接的に描かれている。この天の野原は物語で記載される天上世界の中では最も美しい場所と言える。『銀河鉄道の夜』のプラネタリウム版アニメ(KAGAYA studio,2006)でも天空いっぱい光り輝く「ススキ」、「リンドウ」そして「三角標」のある野原を映し出していた。本稿では、この光輝く「ススキ」を取り入れた絵画的とも言える風景描写を賢治が何をヒントにして思い描いたのかを考察してみる。また、この物語の舞台が南欧ということもあり、その天上にあまりにも日本的な「ススキ原」の風景を採用した理由についても考察したい。

ジョバンニは、白鳥と書いてある駐車場のしるしの、すぐ北を指しました。

「さうだ。おや、あの河原は月夜だらうか。」

そっちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすゝきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立ててゐるのでした。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」ジョバンニは云ひながら、まるでね上がりたいくら

る愉快になって、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛を吹きながら一生けん命延びあがって、その天の川の水を、見きはめようとしましたが、はじめはどうしてもそれが、はっきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとほって、ときどき眼の加減か、ちらちら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のやうにきらっと光ったりしながら、声もなくどンドン流れて行き、野原にはあっちにもこっちにも、燐光の三角標が、うつくしく立ってゐたのです。遠いものは橙や黄いろではっきりし、近いものは青白く少しかすんで、或いは三角形、或いは四角形、あるいは電(いなづま)や鎖の形、さまざまにならんで、野原いっぱい光ってゐるのでした。ジョバンニは、まるでどきどきして、頭をやけに振りまわした。するとほんたうに、そのきれいな野原中の青や橙や、いろいろかゞやく三角標も、てんでに息をつくやうに、ちらちらゆれたり顫(ふる)へたりしました。

「ほくはもう、すっかり天の野原に来た。」ジョバンニは云ひました。

「それにこの汽車石炭をたいてゐないね。」ジョバンニが左手をつき出して窓から前の方を見ながら云ひました。

「アルコールか電気だらう。」カムパネルラが云ひました。

ごとごとごとと、その小さなきれいな汽車は、そらのすゝきの風にひるがえる中を、天の川の水や、三角点の青白い微光の中を、どこまでもどこまでも、走って行くのでした。

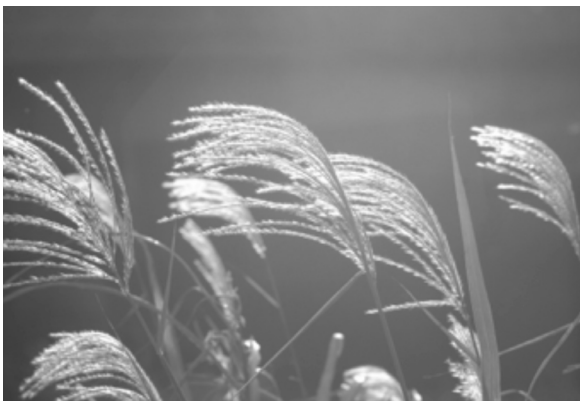
「あゝ、りんだうの花が咲いてゐる。もうすっかり秋だね。」カムパネルラが、窓の外をさして云ひました。

線路のへりになったみじかい芝草の中に、月長石でも刻まれたやうな、すばらしい紫のりんだうの花が咲いてみました。

(六、「銀河ステーション」) 下線は著者

1. 光る銀河とススキ

カメラを手にするると、一度は秋の夕暮れの逆光に光り輝く「ススキ(イネ科: *Miscanthus sinensis* Andersson)」の穂を撮ってみたいくなる(第1図)。Web上でも「にわかカメラマン」が投稿した光輝く「ススキ」の穂の写真をたくさん見ることが出来る。特に、「ススキ」の穂が銀白色に輝くのは、果実が熟して小穂基部の束になった白い基毛が開くときだ。なぜ、夕暮れ時に逆光で「ススキ」の穂は光輝くのであろうか。これは、背景が暗いところに逆光で「ススキ」を見ると、小穂基部の白い基毛が黒い背景の中に光って浮かび上がるからだと考えられている。写真用語では、輪郭線にハイライトが生じることをラインライト効果という。



第1図. 逆光で光り輝くススキ(神奈川県大磯町)。

賢治は逆光に光り輝く「ススキ原」を童話『鹿踊りのはじまり』に文章として登場させている。この童話は、『銀河鉄道の夜』の第一稿(1924年)を執筆し始めた頃に出版された最初の童話集『注文の多い料理店』に収録されている。『鹿踊りのはじまり』は、北上川の東側から移住して畑を開いて暮していた主人公(嘉十)が、湯治のために西の山にある温泉に出かけていく途中で6頭の鹿に出くわすことで物語が始まる。鹿たちは、太陽に向かって一列に並び右から1頭ずつ順番に歌い出す。嘉十はこれを「ススキ」の影に隠れて見ている

太陽はこのとき、ちやうどはんのきの梢の中ほどにかかって、すこし黄いろにかゞやいて居りました。鹿のめぐりはまただんだんゆるやかになつて、たがひにせはしくうなづき合ひ、やがて一列に太陽に向いて、それを拝むやうにしてまつすぐに立つたのでした。嘉十(かじふ)はもうほんた

うに夢のやうにそれを見とれてみたのです。

一ばん右はじにたつた鹿が細い声でうたひました。

「はんの木(ぎ)の
みどりみぢんの葉の向(もご)さ
ぢやらんぢやらんの
お日さん懸がる。」

その水晶の笛のやうな声に、嘉十は目をつぶつてふるへあがりました。右から二ばん目の鹿が、俄かにとびあがつて、それからからだを波のやうにうねらせながら、みんなの間を縫つてはせまはり、たびたび太陽の方にあたまをさげました。それからじぶんのところに戻るやびたりととまつてうたひました。

「お日さんを
せながんさしよへば、はんの木(ぎ)も
くだけで光る
鉄のかんがみ。」

はあと嘉十もこつちでその立派な太陽とはんのきを拝みました。右から三ばん目の鹿は首をせはしくあげたり下げたりしてうたひました。

「お日さんは
はんの木(ぎ)の向(もご)さ、降りでも
すすぎ、ぎんがぎが
まぶしまんぶし。」

ほんたうにすすきはみんな、まつ白な火のやうに燃えたのです。

(『鹿踊りのはじまり』宮沢賢治 1924年) 下線は著者

この引用文で注目したいのは、太陽に向かって三番目の鹿がうたう「お日さんは／はんの木の向さ、降りでも／すすぎ、ぎんがぎが／まぶしまんぶし。」という歌である。「ぎんがぎが」は「ぎんがぎんが」や「ぎがぎが」と同様に東北の方言で「光り輝く」様をいう。三番目の鹿の歌を標準語に翻訳すれば「太陽はハンノキの向こうで沈んでいくが「ススキ」の穂はギラギラと輝いて眼も眩むようだ」である。また、「ぎんがぎが」の「ぎんが」は『銀河鉄道の夜』の自ら青白く光る「銀河」を連想させる。なぜ「銀河」が光るかは、『銀河鉄道の夜』の第一章「午後の授業」で、ジョバンニの先生が理科の授業で「天の川」の中の「このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じやうにじぶんで光ってゐる星(恒星)」だからと教えてくれる。

2. 光る光源を画面の中心に配置した画家たち

『銀河鉄道の夜』の天上では、川が流れ、森や野原のある我々が日常よく目にする風景が広がるが、そこに存在する多くのものは白や青や黄色の光や燐光で満ち溢れている。では、この光り輝く天上の風景描写は

何をヒントにしたのだろうか。多分、賢治が観賞したであろう絵画によると思われる。賢治は、稗貫郡立稗貫農学校（現在の県立花巻農業高等学校）に勤務していた頃、学校の階段にセザンヌやゴッホなどの複製画を飾り、時おり説明を加えて生徒たちに鑑賞させたという（板谷，1992）。しかし、賢治に影響を与えたのは印象派の画家たちというよりは、その先駆者というべきイギリス人のターナー（Joseph Mallord William Turner;1775-1851）（藤田，2001）やドイツ人のフリードリッヒ（Caspar David Friedrich;1774-1840）といったロマン派の画家たちである。また、ロマン派と印象派の懸け橋を担ったアメリカ人の画家であるホイッスラー（James Abbott McNeill Whistler;1834-1903）も加えられるべきである。板谷（1992）によると、賢治は、特に「光と色彩の錬金術師」と呼ばれたターナーが好きだったようで、盛岡高等農林学校時代にしばしば小岩井農場に散策にでかけていたが、ある時、美しい色彩に満ちた幻想的な光景を見たようで、知人に「紫、青、赤、黄などいろいろな色が見えだし、美しい天地だと思えばそう見えだし、テムズ川だと思えばそうも見えだし」と話したという。ターナーはテムズ川に魅せられ生涯にわたって川沿いの地区に暮した。

『春と修羅』の中の詩「不貪慾戒（ふとんよくかい）」には、「粗剛なオリザサチバといふ植物の人工群落が／タアナさへもほしがりさうな／上等のさらど色になってゐることは／慈雲尊者（じうんそんじや）にしたがへば／不貪慾戒のすがたです」（1923.8.28）と画家のターナーとターナーが好んだ黄色（＝さらど色）が登場してくる。「不貪慾戒」は、「貪らない」とか「慾深くならない」の意味であり、慈雲（1718-1805）は江戸時代後期の真言宗の僧侶である。慈雲は仏教で言うところの「十の戒め」を記載した『十善法語』を著していて、その中からこの詩に関連する部分を『新宮澤賢治語彙辞典』の「不貪慾戒」の項に準じて説明してみる。慈雲は『十善法語』の中で「不貪慾戒に住して、色に対すれば、一切の青黄赤白が此眼を養ふに足るじゃ。一切松風水声・絲竹管弦が此耳を喜ばしむるに足るじゃ」と述べているが、これによれば、物を前にしてその色彩を楽しんで物欲を起こさない心のあり方を不貪慾戒というのだから、風景画家は、自然の中に色彩を見出す者であるがゆえに、不貪慾戒に住することになる。そして賢治もターナーの心境で黄金色に実った稲の群落に眼を養い、心を遊ばせているのだから、慈雲尊者に従うならば、たしかに不貪慾戒に住するはずである（原，1999）。『新宮澤賢治語彙辞典』の説明に異論はないが、ターナーが黄色を好んだ理由を付け加えるとすれば、ターナーは「霧の街」と揶揄されるロンドンに永く住んでいたのが太陽を象徴する黄色に憧れたからだと考える（太陽の色は日本では一般的に赤）。これは、賢治にも言えるがターナーよりは

より悲劇的である。春から秋にかけてオホーツク海気団より吹く冷たい湿った北東の風（「やませ」）が東北地方の太平洋岸へ吹くと、平野部で濃霧が発生し冷夏（冷害）となる。「やませ」が稲の開花時期に吹けば、日照時間減少と気温減少により収穫は減少する（凶作）。賢治は東北の凶作による飢饉を何度も見ていたので賢治も南欧の黄色い太陽や青い空には憧れを抱いたと思う。賢治は『春と修羅第三集』で東北（岩手県）の冷害の状況を克明に記録している。特に、昭和二年（1927年）は未曾有の凶作に見舞われた。詩「ダリア品評会席上」には「西暦一千九百二十七年に於る／当イーハトーボ地方の夏は／この世紀に入ってから曾つて見ないほどの／恐ろしい石竹いろと湿潤さを示しました／為に当地方での主作物 *oryza sativa*／稲、あの青い槍の穂は／常念に比し既に四割も徒長を来たし／そのあるものは既に倒れまた起きず／あるものは花なく白き空穂を得ました」とある。このように、賢治は自らの境遇と類似点の多いターナーに共感し、その絵画に魅了されたように思える。

3. ターナーの画法

ターナーは、初期には写実的な風景画を描いていたが、44歳のときイタリア旅行（1919年以降4回）を経験した後は、イタリアでの強烈な「光」体験から大気と「光」の効果を追求することに主眼を置き始める（関口，1988）。その好例が《レグレス》（第2図，1828-29年，1837年加筆）である。画面には建物や船が描かれているが、「光」が画面のほぼ中央から観賞者に向かって眩いばかりに放射され、それらを形あるものとして浮立たせるというよりは溶解させている（富岡，2003；東京都美術館で開催されたターナー展、



第2図. 《レグレス》 J.M.W.ターナー .
1828-29年, 1837年加筆.

2013)。ターナー以前の絵画では、画面の外に光源を置く構図が多かった。《レグレス》の主題は、ポエニ戦争から採られている。伝説によれば古代ローマの将軍レグレスはポエニ戦争で敵国の捕虜となり、暗い地下牢に閉じ込められ、顔を切り取られたのち、牢獄から引きずり出され太陽の光を浴びて失明する。ターナーは、レグレスの「光」の体験を我々観賞者に共有させようとしたとされる。さらに《ヴェネチア、税関舎とサン・ジョルジョ・マジョーレ》(1842)では、次第に光と空気の中に溶け込んでゆく水の都ヴェネチアの静かなたたずまいが、僅かな細部描写を残しながら、ほぼ色彩のみで表現されている(関口, 1988)。色彩も単純化され、光り輝くヴェネチアの家と街の光景は白、黄色、青の三色で表現される。最晩年の作品に《湖に沈む夕日》(1940～45年)があるが、これも前2作品と同様に光源を真正面に持ってきているが、建物や人物もなく、強烈な「光」そのものを描いてみせている。多分、『銀河鉄道の夜』の天上の光輝く風景描写の色彩はターナーの影響があるものと思われる。本稿の引用文で、三角標が「遠いものは橙や黄いろではっきりし、近いものは青白く少しかすんで」とあるのは、光源である銀河と物語の中の観測者の間にある近くの構造物をターナーの絵画のようにかすんで見せたか、あるいは青白く輝く「琴座のベガ」を妹と見なし眼が潤んだかであろう。

4. ホイッスラーの画法

天上の夜の風景描写の「構図」は賢治の詩「宗谷挽歌」に登場するホイッスラーの影響であろう。ホイッスラーは、ターナーを崇拝して色彩を重視し、色彩と形態の調和に作風の主眼を置き(耽美主義)、主にロンドンで活動した。浮世絵をはじめとする日本美術の影響も強く受けていて、ジャポニズムを欧州へ紹介した画家としても知られている。ホイッスラーは肖像画などの人物画を画く一方で「ノクターン」と呼ばれるテムズ川の夜景を描いた一連の作品を残した。風景画の代表作に《青と銀のノクターン》(第3図, 1871-72)、《ノクターン：青と銀色－クレモンの灯り》(1872)、《青と金のノクターン－オールド・パターシー・ブリッジ》(1872-75)、《黒と金色のノクターン－落下する花火》(1875)などがある。賢治は音楽にも興味があり、レコード収集家としても有名であった(萩谷, 2013)。賢治が所持していたレコードのうちフランス人の作曲家ドビッシー(Claude Achille Debussy; 1862-1918)の『夜想曲』(nocturnes; 1900)は、ホイッスラーの「ノクターン」と題される絵画のシリーズから着想されたと言われている。賢治は、幻想感覚を含む特異な感覚を有するので、ホイッスラーの絵画(多分雑誌などに記載された複製画か写真)をみたとき、同時にドビッシーの『夜想曲』が幻聴となって聞こえたのかもしれない。



第3図. 《青と銀のノクターン》 J.A.M.ホイッスラー. 1871-72

ホイッスラーの画法は、色彩が単純化され、対象物の輪郭を失い、それらが一体になって作品が形成される(真屋, 1999)。《青と銀のノクターン》は、霧に煙るテムズ川と輪郭がぼやけた川岸の向こう側の三角形をした建築物(倉庫、宮殿あるいは教会?)と、川岸のこちら側の東洋風(ササ?)の植物が描かれている。ホイッスラーは自らの著作『十時の講和』(1885)でテムズ川の夜景について、「夜霧が帳となって川辺を包むと、みすばらしい建物は闇に姿を紛らわす。天に向かう煙突は鐘楼にかわり、倉庫もまた夜の宮殿へと変貌を遂げる。街のすべてが宙に浮き、眼前に拡がるのは妖精の国である。」と述べている(スボルディング, 1997)。ホイッスラーの「ノクターン」は、光り輝くとはいかないが、色彩は青が主体で黄色が灯りとして点在していて、どこことなく『銀河鉄道の夜』の天上の「三角標」のある風景を彷彿させる。(後篇に続く。)

引用文献

- 原 子朗. 1999. 新宮沢賢治語彙辞典. 東京書籍. 東京.
 藤田治彦. 2001. ターナー－近代絵画に先駆けたイギリス風景画の巨匠の世界. 六耀社. 東京.
 萩谷由美子. 2013. 宮澤賢治の聴いたクラシック. 小学館. 東京.
 板谷栄城. 1992. 素顔の宮澤賢治. 平凡社. 東京.
 真屋和子. 1999. プルーストの眼－ラスキンとホイッスラーの間で－. 一橋論叢. 122(3):432-450.
 宮沢賢治. 1986. 文庫版宮沢賢治全集 10巻. 筑摩書房. 東京.
 関口葉子. 1988. J・M・W・ターナーの研究－イタリア旅行の意味について－. 哲学会誌. 12:63-77.
 スボルディング F. (吉川節子訳). 1997. ホイッスラー. 西村書店. 東京.
 富岡進一. 2003. J. M. W. ターナーにおける光と色彩. 成城美学美術史. 9:49-70.